



合意の推定における事例情報の効果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井手, 亘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004749

合意の推定における事例情報の効果

井 手 亘

フォールス・コンセンサス（合意の誤認）とは、自分の判断や意見を一般的なものと見なし、集団内でそれと同じ判断や意見を持つ人、つまり合意する人の数を相対的に多く見積る現象である。Ross 他（1977）は、フォールス・コンセンサスを「自分の行動における選択や判断が、その場の状況に対して、相対的に一般的で適切なものであると見なし、一方、それ以外の反応を一般的でなく、偏っていて、不適切である、と見なすこと。（p.280）」と述べている。なお「一般的」とは「対象となる集団のより多くの人に共有されている」と言う意味である。実際の研究では、ある反応をする人が集団の中にどれくらいの割合でいるかを推定させた時、その反応と同じ反応をする人による推定値が別の反応をする人による推定値よりも大きい、と言う現象をフォールス・コンセンサスとしている。

なお、フォールス・コンセンサスと過大評価とは区別しておかなければならない。過大評価とは自分自身の反応と同じ反応をする人、つまり合意する人の割合の推定値がその反応をする人の実際の割合に対して過大であることをさしている。過大評価は実際の値に対する推定の正確さを問題としているのである。一方、フォールス・コンセンサスは、割合の推定値が実際の値に対して異なることを問題とするのではなく、反応の異なる人同士での推定値の違いを問題とし、その場合にそれぞれ自分と同じ反応をする人、つまり自分と合意する人の割合を多く見積るということをさしている。フォールス・コンセンサスは

立場の違いによる推定の相対的な差を問題にしているのである。従ってフォールス・コンセンサスが起ころうとしても、合意する人の割合の推定値そのものは実際の値に対して正確な推定であったり、推定値が実際の値よりも低く過小評価となっている場合もあるわけである。

これまでのフォールス・コンセンサス研究 (e. g., Mullen et al., 1985; Marks & Miller, 1987; Mullen & Hu, 1988) によれば、フォールス・コンセンサスの原因として認知的な原因と動機付けによる原因の2つの考え方があげられている。認知的な考え方では、合意は記憶している事例などの情報に基づいて論理的に推定されるが、その過程で歪みが生じフォールス・コンセンサスが起こればと考える。その代表的なものに選択的接触 (selective exposure) による解釈がある。この考え方では、人は接触することの多い友人、知人の反応を事例として記憶することが多いが、一般に人は意見、判断などが類似している人と友人、知人となることが多い (Berscheid & Walster, 1978)。従って人はこれらの人々と選択的に接触することで、自分の反応に類似した反応を多く事例として記憶することになる。そして合意を推定する場合にはこの偏った事例をもとにして推定するためにフォールス・コンセンサスが起こればと考えるのである。

また、情報の認知的利用可能性の解釈も主要な認知的説明である。これによれば、人は頻度や確率を判断する場合に全ての情報を記憶から取り出して検討するのではなく、認知的に利用しやすく想起しやすいものだけを使って判断するという簡略な方法 (availability heuristic) を用いる事がある (Tversky & Kahneman, 1973) が、これがフォールス・コンセンサスの原因となると考える。この考え方では、想起しやすい事例が合意の推定に用いられるとするが、この想起しやすい事例とはその人自身の反応のように目だつ (salient) もの、その人の認知的枠組みに合うもの、つまりその人自身の反応に似たもの、などであるから、事例としては偏ったものであることが多い。人がこれらの想起し

やすい反応を事例として用いて合意の推定を行なうとすると、事例の偏りが推定に影響して偏った推定、つまりフォールス・コンセンサスが生じると考えられる。

これに対して動機付けによる説明では、人が自分の意見、判断を一般的なものの、正しいものと見なそうとする自己防衛、自己高揚、自尊心の維持などの自己の評価に関する動機付けがフォールス・コンセンサスの原因であると考えられる。Festinger (1954)の社会的比較理論によれば、明確な基準のない社会的な意見、判断において、人が自分の反応を評価する時に基準とするのは他の人々の反応である。人は自分の反応が他の多くの人の反応と同じであればその反応は一般的で正しいと考え、他の人々の反応を自分の反応の一般性、正しさの根拠と考える。このことから、逆に自分の反応が一般的で正しいとすれば他の多くの人も自分と同じ反応をしているはずであると考えられる。従って、自分の反応の一般性、正しさを求める動機付けを持った人は、他の多くの人も自分と同じ反応をしていると見なそうとするので、合意の推定において自分と同じ反応をする人の割合を高く推定し、自分と異なる反応をする人の割合を低く推定する、即ちフォールス・コンセンサスが起こると考えられる。このような動機付けは、基準があいまいな場合、客観的な情報が不足して自分の反応に自信のもてない場合、自分の反応が望ましくない反応と見られる可能性のある場合などに強く働くと考えられる。これがフォールス・コンセンサスの自己に関する動機付けによる説明である。

認知的説明と動機付けによる説明のどちらが妥当であるかについては、これまでの研究ではそれぞれを支持する結果があり論争が続けられている (Mullen, 1983; Marks & Miller, 1987; Mullen & Hu, 1988)。本研究では以下の2つの実験によって、一般的な意見や判断の推定をする場合のフォールス・コンセンサスについて、認知的な説明と動機付けによる説明を比較し、両者の相対的重要性を検討した。

実験 1

認知的な考え方では合意の推定はいろいろな情報に基づいて行われると考えるが、その場合の重要な情報として記憶から取り出される他の人の反応の事例がある。この事例は人がいろいろな人に接触することで集められるが、人はまんべんなくいろいろな人と接触することは不可能であり、接触する相手が一部のみに偏るのは避けることができない。このような選択的接触によって集められる事例は当然に偏ったものとなる。実際には人が接触をする相手はほとんどの場合その人の身近な人である。そして身近な人はその人の反応に似た反応をすることが多いから、結局は自分と似た反応をする人を事例として集めることになる。しかし、人が必ずしも自分と似た反応をする人ばかりと接触するとは限らない。多くの場合自分の反応と、選択的に接触する事例とは同じであるが、接触する事例はその他の条件によっても左右されるから、状況によっては自分の反応と異なる反応をする人ばかりに選択的に接触することになる人もある。このような人の集める事例は大多数が自分自身の反応とは異なる反応の事例となる。従って選択的接触の考え方によれば、反応の違う人がそれぞれ自分とよく似た反応をする人に選択的接触をした場合、両者の集めた事例には差があるので、それに基づく合意の推定ではフォールス・コンセンサスが起ころうが、例えば反応の違う人同士でも、それぞれが接触する人々が同じであれば、両者の集めた事例は同じとなり、それに基づく合意の推定にも差がなくフォールス・コンセンサスが起ころないと考えられる。このように選択的接触の考え方では、事例に基づく論理的な判断が合意の推定の基礎にあり、その事例の偏りがフォールス・コンセンサスの原因であると考えられる。

自己の評価に関する動機付けによる考え方では、集めた事例から合意の推定を行う過程に動機付けが影響して偏りが生じ、それがフォールス・コンセンサスを起こすと考える。自己に関する動機付けを考慮すると、集めた事例がたと

え同じであっても、事例から合意を推定する時に推定する人自身の反応が自己に関する動機付けの方向に影響し、それぞれ自分自身の反応を正しく、一般的であると見ようとする。この動機付けの方向の違いが合意の推定に影響して、それぞれ自分の反応について高く推定すると考えられる。その結果、同じ事例から合意の推定を行ったとしても推定する人自身の反応の違いによってフォールス・コンセンサスが生じると考えられる。このように動機付けによる考え方では、事例などの情報を基にして行なう合意の推定の時点で動機付けの影響による偏りが生じると考える。

実験では、各被験者に意見や判断についてA、Bの2つの選択肢から選択する課題を与え、被験者自身の選択と、同じ大学の学生の中でそれぞれの選択肢を選ぶ人の割合の推定を行わせた。また、各被験者が推定においてどのような事例を利用したかを直接測定する事は困難であったので、代わりに各被験者に「その大学の典型的な学生にする選択」を予想して判断させた。本実験のような2肢選択の課題では、被験者が推定で利用した事例の中で多数を占める反応が、典型的な学生にする反応とされると考えられるから、この結果を被験者の利用した事例の内容の指標とし、判断された典型的な学生の反応が、被験者の利用した事例の中で多数を占めた事例での反応であるとみなした。なお実験計画としては質問に対する被験者の反応の結果に応じて、被験者が2つの選択肢のどちらを選んだか、その被験者が「典型的な学生を選択」として2つの選択肢のどちらを選んだか、という2つの要因で被験者を分け、 2×2 の計画とした。

実験1の仮説としては、第1に合意の推定が認知的な選択的接触に基づくものであれば、利用した事例で多数を占める事例が互いに異なる被験者は、他の人々の選択の割合の推定値が異なると予測され、第2に合意の推定に自己の評価に関する動機付けが影響するとすれば、被験者自身の選択が異なる被験者は他の人々の選択の割合の推定値が異なると予測された。

方 法

被験者

被験者はP大学の女子学生111名であり、社会心理学の授業の受講生であった。質問紙に記入もれのあった人を除いたので、分析に用いた被験者は課題により109名から111名の間であった。

手続き

被験者は5つの判断課題について2肢選択により質問に答えた。それぞれの課題について被験者は、被験者自身の2つの選択肢A、Bの選択、「典型的なP大学生」による2つの選択肢A、Bの選択の予想の判断、P大学生のうち何パーセントの人が選択肢Aを選ぶかについての推定、にそれぞれ答えた。課題としては、予備調査において大学生の多くが片方の選択肢に偏ることのなかった5つの課題を用いた。これらの課題はそれぞれ、「1、地球の温暖化を食い止められると思いますか。A、はい B、いいえ」、「2、あなたの部屋には電話がありますか。A、はい B、いいえ」、「3、就職するなら、A、忙しいけれども給料の高い方がいいですか、それとも、B、給料は高くないが自分の時間の持てる方がいいですか。」、「4、眼鏡 かコンタクトを着用していますか。A、はい B、いいえ」、「5、毎朝必ず新聞に目を通しますか。A、はい B、いいえ」であった。

結 果

まず、各被験者を被験者自身の選択と「典型的なP大学生」の選択の判断によって2要因で 2×2 の4グループに分けた。各課題での各グループの被験者の数とP大学生のうち選択肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値の平均は、表1から表5の通りであった。

表1 実験1課題1「温暖化阻止」で選択肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

	典型的P大学生	
	A はい	B いいえ
被験者の選択 A はい	59.60 N=25	34.62 N=13
B いいえ	55.13 N=16	30.38 N=55

表2 実験1課題2「部屋に電話」で選択肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

	典型的P大学生	
	A はい	B いいえ
被験者の選択 A はい	68.04 N=24	35.00 N=13
B いいえ	58.49 N=39	29.31 N=35

表3 実験1課題3「職業の選択」で選択肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

	典型的P大学生	
	A 忙しく高給	B 自由で高くない
被験者の選択 A 忙しく高給	65.57 N=30	49.65 N=20
B 自由で高くない	57.54 N=26	42.79 N=34

表4 実験1課題4「眼鏡の着用」で選択肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

	典型的P大学生	
	A はい	B いいえ
被験者の選択 A はい	69.29 N=52	51.50 N=10
B いいえ	66.21 N=29	41.28 N=18

表5 実験1課題5「新聞を読む」で選択肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

	典型的P大学生	
	A はい	B いいえ
被験者の選択 A はい	67.92 N=12	32.31 N=26
B いいえ	60.00 N=6	30.24 N=66

この推定値について各課題別に、被験者自身の選択と典型的なP大学生の選択の判断の2要因で分散分析を行った(表6参照)。その結果、課題2、課題3において被験者自身の選択の主効果が有意であった(課題2、 $F(1,107)=8.20$, $p<.01$, 課題3、 $F(1,106)=6.70$, $p<.05$)。課題2では「A、自分の部屋に電話がある」を選んだ被験者のほうが「B、自分の部屋に電話がない」を選んだ被験者よりも推定値が有意に大きく、電話のある人の方が電話のない人よりも、他の学生について電話を持っている人が多いと判断していた。課題3では「A、忙しいが給料が高い職業」を選んだ被験者のほうが「B、給料は

表6 実験1 課題1—課題5の分散分析の表と β 値

変 動 因	自 由 度	M S	F	P	β 値
課題1					
被験者選択	1	383.533	1.873	.174	.11
典型的P大学生	1	12926.664	63.113	.000	.63
交互作用	1	.295	.001	.970	
課題2					
被験者選択	1	1576.103	8.200	.005	.18
典型的P大学生	1	24818.072	129.121	.000	.72
交互作用	1	86.616	.451	.503	
課題3					
被験者選択	1	1480.527	6.700	.011	.22
典型的P大学生	1	6233.957	28.210	.000	.44
交互作用	1	9.089	.041	.840	
課題4					
被験者選択	1	604.884	3.062	.083	.14
典型的P大学生	1	9312.454	47.138	.000	.55
交互作用	1	243.653	1.233	.269	
課題5					
被験者選択	1	217.481	.958	.330	.08
典型的P大学生	1	15168.491	66.787	.000	.63
交互作用	1	112.771	.497	.483	

高くないが自分の時間がある職業」を選んだ被験者よりも推定値が有意に大きく、Aを選ぶ人の方がBを選ぶ人よりも他の学生についてAを選ぶ人が多いと判断していた。従って、これら2つの課題ではフォールス・コンセンサスが見られたことになる。しかし、他の3つの課題では推定値に有意な差はなく、フォールス・コンセンサスは見られなかった。

典型的なP大学生の選択の判断の効果については、課題1から課題5の全てにおいて主効果が有意であった（課題1, $F(1,105) = 63.11$, $p < .01$, 課題2, $F(1,107) = 129.12$, $p < .01$, 課題3, $F(1,106) = 28.21$, $p < .01$, 課題4, $F(1,105) = 47.14$, $p < .01$, 課題5, $F(1,106) = 66.79$, $p < .01$ ）。いずれの課題においても、典型的なP大学生が選択肢Aを選ぶと判断した人の方が、典型的なP大学生が選択肢Bを選ぶと判断した人よりも推定値が有意に大きかった。

また、要因間の交互作用はどの課題においても有意ではなかった。さらに要因の効果の大きさを示すベータ値は、全ての課題において典型的なP大学生の選択の要因のベータ値が、被験者の選択の要因のベータ値よりも大きく、少なくとも2倍の大きさがあった。

推定値の正確さについては、まず被験者自身の選択のデータを用いて各課題で選択肢Aを選んだ被験者の割合を算出し、これをP大学において各課題で選択肢Aを選ぶ学生の割合の真の値(%)と見なした。各課題別に各条件の推定値の平均とこの真の値との間でt検定を行い、表7から表11にその結果を示した。その結果、典型的P大学生が選択肢Aを選ぶと判断した被験者の推定値の平均は、いずれも真の値に比べて有意に大きく過大評価であった。典型的P大学生が選択肢Bを選ぶと判断した被験者の推定値の平均は、真の値と有意な差がないかまたは有意に小さく過小評価であった。しかし、推定値の正確さについて被験者自身の選択の要因による一貫した推定値の平均の差は見られなかった。

表7 実験1課題1「温暖化阻止」のt検定 表8 実験1課題2「部屋に電話」のt検定

真の値 34.86	典型的P大学生	
	A はい	B いいえ
被験者の選択 A はい	59.60 t = 10.80**	34.62 t = 0.081 ns
B いいえ	55.13 t = 4.76**	30.38 t = 2.17*

*p<.05, **p<.01

真の値 33.33	典型的P大学生	
	A はい	B いいえ
被験者の選択 A はい	68.04 t = 10.47**	35.00 t = 0.57 ns
B いいえ	58.49 t = 11.06**	29.31 t = 1.87 ns

*p<.05, **p<.01

表9 実験1課題3「職業の選択」のt検定 表10 実験1課題4「眼鏡の着用」のt検定

真の値 45.45	典型的P大学生	
	A 忙しく高給	B 自由で高くない
被験者の選択 A 忙しく高給	65.57 t = 7.36**	49.65 t = 1.09 ns
B 自由で高くない	57.54 t = 5.07**	42.79 t = 1.02 ns

*p<.05, **p<.01

真の値 56.88	典型的P大学生	
	A はい	B いいえ
被験者の選択 A はい	69.29 t = 6.20**	51.50 t = 1.47 ns
B いいえ	66.21 t = 3.77**	41.28 t = 4.35**

*p<.05, **p<.01

表11 実験1課題5「新聞を読む」のt検定

真の値 34.55	典型的P大学生	
	A はい	B いいえ
被験者の選択 A はい	67.92 t = 5.72**	32.31 t = 0.78 ns
B いいえ	60.00 t = 11.38**	30.24 t = 2.38*

*p<.05, **p<.01

考 察

推定値の判断においては、典型的なP大学生の選択の判断の効果が全ての課題に一貫して有意であり、典型的なP大学生の選択の判断には、被験者が合意の推定に利用した事例の中で多くを占めた事例が反映されているとすると、合意の推定は被験者の利用した事例によって変化したと言える。これは合意の推定が選択的接触によって集められた事例に基づくという第1の仮説を支持する結果であった。なお、全ての課題で典型的なP大学生が選択肢Aを選ぶとした人の方が選択肢Bを選ぶとした人よりも推定値が大きいという結果となったが、選択肢のA、Bは実験において2つの選択肢を任意に割り当てただけであり、この結果におけるA、Bの違いは特に意味はないと考えられる。

フォールス・コンセンサスそのものである被験者自身の選択による効果は5課題のうち2課題で見られただけであった。動機付けによる仮説の前提は、被験者自身の選択が合意の推定に影響することであるから、この結果はこの仮説を十分に支持するものでなく、被験者自身の選択が常に合意の推定に影響するとは言えないといえる。また典型的なP大学生の選択の判断と被験者自身の選択の交互作用も有意ではなく、選択的接触と動機付けの間には関連のないことが示された。

さらに要因の効果の大きさをベータ値で比較すると、典型的なP大学生の選択の判断の効果は被験者自身の選択による効果の2倍以上の大きさがあつた。実際に課題2、課題3以外では、利用した事例で多数を占める事例が同じ被験者は被験者自身の選択が互いに違っても合意の推定に差はなく、一方、利用した事例で多数を占める事例が異なる被験者は被験者自身の選択が同じでも合意の推定に差が見られた。このことから、合意の推定は主に事例などの情報を基にして論理的に行われ、推定過程に対する自己の評価に関する動機付けの影響は相対的に小さいものであり、従って、合意の推定の差であるフォールス

・コンセンサスは主に選択的接触などの認知過程に由来すると考えることができる。

他の人の選択の推定値の正確さについては、典型的なP大学生が選択肢Aを選ぶとした人では、その人自身の選択に関わらず全ての課題で他の人が選択肢Aを選ぶ推定値に過大評価が見られた。これは、推定する際に事例として選択肢Aを選ぶ人を多く用いたからであると考えられる。また、典型的なP大学生が選択肢Bを選ぶとした人では、逆に一部で他の人が選択肢Aを選ぶ推定値に過小評価が見られた。この実験では選択肢は2つだけであるから、選択肢Aを選ぶ推定値を過小評価したことは、一方で選択肢Bを選ぶ推定値を過大評価したことを意味する。典型的なP大学生が選択肢Bを選ぶとした人が、他の人が選択肢Bを選ぶ推定値を過大評価したことは、推定する際に事例として選択肢Bを選ぶ人を多く用いたからであると考えられる。この両方の結果はどちらも、推定が事例に基づいて行われるという認知的説明を支持するものであった。

一方、推定の正確さに被験者自身の選択の要因による一貫した傾向は見られなかった。他の人の選択の推定に動機付けが関わるとすれば、被験者自身の選択と同じ選択をする人の割合を過大評価することが考えられるが、そのような結果は見られなかった。従って、この結果は推定に動機付けが影響するという考え方を支持しなかったといえる。

実験1の結果からは、事例の情報に基づいて合意の推定をすることのできる意見や判断を課題とした場合、推定は主に集めた事例に基づいて論理的に行われ、推定過程に動機付けの与える影響はあまりないと結論できる。では推定に利用される事例はどのようなものであろうか。選択的接触の考え方では人は身近な人の反応を事例として利用することが多いとされるが、推定の対象となる他の人の集団によっては、身近な人の事例はその集団について推定するのに適切な代表的な事例とはならないこともある。そこでどのような事例が利用され

るのかという問題について実験2で検討した。

実験 2

フォールス・コンセンサスを調べる場合には、被験者に他の人の中で、ある反応をする人の割合を推定させるのであるが、その際「この教室にいる人の中で」とか「大学生の中で」というように推定の対象となる他の人の集団を指定する。この集団は「この教室にいる人」のように小さい場合や「大学生」のように大きい場合がある。一般に集団が大きければ、適切な推定をするために必要である事例は幅広く集められたものでなければならず、小さい集団について推定する場合の事例とは異なった事例が必要である。従って、たとえ集団が包含関係にある大小2つの集団であっても、利用される事例の違いのために、大きい集団と小さい集団とでは推定値が異なると考えられる。また大きい集団の場合、大きさに応じて事例を広く偏りなく集めることは困難であるから、集めた事例がその集団を代表したものであるという代表性も低くなる。もし、推定において事例の代表性の低さが考慮されたとしたら、集団が大きいほど事例の代表性が低くなるから、推定において事例の与える影響は小さくなり、その一方でその人自身の選択が推定に与える影響が相対的に大きくなると考えられる。従って、集団が大きくなるほど推定の偏りとしてのフォールス・コンセンサスは大きくなると考えられる。

それに対して、被験者が集団の大きさに関わらず常に想起しやすい自分の身近な人の事例を推定の材料に用い、しかもその代表性を考慮しないならば、合意の推定において事例の影響力は集団の大きさに関わらず同じとなる。従って、集団の大きさはフォールス・コンセンサスの大きさに影響しないと考えられる。Mullen 他 (1985) によるこれまでの研究のメタ分析によると、集団の大きさとフォールス・コンセンサス効果の大きさの間には有意な相関が見られなかったが、これはこの考え方を支持するものである。また特に、集団として

包含関係にある大小の集団を対象として推定する場合には、同じ事例が推定の材料として使われる可能性があり、その場合には推定値そのものも集団の大きさに関わらず同じになると考えられる。実験2では、推定の対象となる他の人の集団の大きさが推定に与える影響について包含関係にある大小の2つの集団を用いて検討した。

また実験1で被験者は、ある反応をする人の割合を推定する前に典型的な学生の反応について判断したが、この判断そのものが結果に影響したことが考えられる。合意の推定において被験者自身の反応と、ある反応をする人の割合の推定を聞く場合、どちらを先に測定するかによってフォールス・コンセンサスの大きさが影響されることが、Mullen 他 (1985) のメタ分析で示されている。これは、先に測定されたものに対する答えが被験者の中で手がかりとなり、記憶から取り出される事例が変化したからであると考えられている。実験1の場合には、最初に典型的なP大学生の選択を判断させたが、これがそれと同じ選択をする人を事例として想起しやすくさせた可能性が考えられる。実験1で典型的なP大学生の選択の判断の効果が大きかった理由として、合意の推定においてこの想起しやすい事例を用いて推定が行われたという解釈も成り立つのである。従って実験2では、典型的な人の選択を判断する条件と典型的な人の選択の判断をしない条件を比較して、合意の推定に対する典型的な人の選択を判断すること自体の効果を検討した。

実験2における予測は以下の通りであった。第1に被験者が他の人の選択を推定する場合に事例の代表性を考慮するのであれば、フォールス・コンセンサスは推定の対象が大きい集団の方が小さい集団よりも大きいと予測された。同時に集団によって異なった事例を使うのであれば推定値は集団によって異なると予測された。一方、第2の仮説として被験者が他の人の選択を推定する場合に事例の代表性を考慮しないのであれば、大小2つの集団でフォールス・コンセンサスの大きさに差はないと予測された。さらに、2つの集団が包含関係に

あると利用される事例も同じ事例となると考えられるから、2つの集団についての推定値そのものにも差がないと予測された。第3の仮説として、典型的な人の選択を判断すること自体が他の人の選択の推定に効果があるとすれば、典型的な人の選択を判断しない条件は判断する条件よりも被験者自身の選択の効果、即ちフォールス・コンセンサスが大きいと予測された。

実験2では推定の対象となる他の人の集団として、包含関係にある大小の2つの集団を用い、また集団の典型的な人の選択を判断する条件と判断しない条件の2条件を設けた。これに被験者が2つの選択肢のどちらを選んだかという要因を加え、被験者自身の選択、典型的な人の選択の判断の有無、推定する集団の $2 \times 2 \times 2$ の3要因の被験者間要因の計画で実験を行った。

方 法

被験者

被験者はP大学の女子学生136名であり社会心理学の授業の受講生であった。質問紙に記入もれのあった人を除いたので、分析に用いた被験者は課題により134名から136名の間であった。

手続き

被験者は実験1と同じ5つの判断課題について2肢選択により質問に答えた。それぞれの課題について被験者は、2つの選択肢A、Bについて被験者自身の選択を行い、次に典型的な人の選択の判断を行なう条件では「典型的な人が選択肢A、Bのどちらを選択すると思うか。」の判断を行い、典型的な人の選択の判断を行わない条件ではこれらの判断は行わなかった。さらに他の人の選択の推定を行ったが、推定する他の人の集団が「P大学生」の条件と「大学生」の条件の2条件があり、それぞれ「P大学生のうち何パーセントの人が選択肢Aを選ぶと思うか。」、「大学生のうち何パーセントの人が選択肢Aを選ぶと思うか。」の推定を行った。

表12 実験2 課題1「温暖化阻止」で選択肢
Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

典型の判断	有		無	
	P大 大学生	大学生	P大 大学生	大学生
被験者の選択 A はい	53.93 N=14	53.18 N=11	56.67 N=9	60.56 N=6
B いいえ	39.48 N=23	33.14 N=29	37.15 N=20	33.37 N=19

表13 実験2 課題2「部屋に電話」で選択
肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

典型の判断	有		無	
	P大 大学生	大学生	P大 大学生	大学生
被験者の選択 A はい	55.10 N=10	53.08 N=13	46.00 N=5	59.00 N=5
B いいえ	39.43 N=28	46.71 N=28	33.00 N=24	38.91 N=23

表14 実験2 課題3「職業の選択」で選択
肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

典型の判断	有		無	
	P大 大学生	大学生	P大 大学生	大学生
被験者の選択 A 忙しく高給	58.60 N=20	57.53 N=15	54.29 N=7	60.67 N=15
B 自由で高く ない	51.00 N=18	44.80 N=25	42.95 N=22	49.23 N=13

表15 実験2 課題4「眼鏡の着用」で選択
肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

典型の判断	有		無	
	P大 大学生	大学生	P大 大学生	大学生
被験者の選択 A はい	66.56 N=18	62.62 N=21	70.00 N=16	72.31 N=16
B いいえ	54.10 N=20	58.84 N=19	60.69 N=13	56.42 N=12

表16 実験2 課題5「新聞を読む」で選択肢
Aを選ぶ人の割合(%)の推定値

典型の判断	有		無	
	P大 大学生	大学生	P大 大学生	大学生
被験者の選択 A はい	48.00 N=8	38.33 N=15	42.27 N=11	53.88 N=8
B いいえ	30.47 N=30	34.08 N=25	24.89 N=18	32.40 N=20

表17 実験2 課題1—課題5の分散分析の表

変 動 因	自 由 度	M S	F	p
課 題 1				
被験者選択(A)	1	11466.935	39.653	.000
典型の判断(B)	1	38.382	.133	.716
集 団 (C)	1	299.989	1.037	.310
A × B	1	261.840	.905	.343
A × C	1	303.688	1.050	.307
B × C	1	84.502	.292	.590
A × B × C	1	7.632	.026	.871
課 題 2				
被験者選択(A)	1	3856.123	10.177	.002
典型の判断(B)	1	1103.411	2.912	.090
集 団 (C)	1	1073.489	2.833	.095
A × B	1	181.340	.479	.490
A × C	1	85.949	.227	.635
B × C	1	36.743	.097	.756
A × B × C	1	366.492	.967	.327
課 題 3				
被験者選択(A)	1	4561.209	16.154	.000
典型の判断(B)	1	34.639	.123	.727
集 団 (C)	1	8.879	.031	.860
A × B	1	7.628	.027	.870
A × C	1	77.728	.275	.601
B × C	1	837.810	2.967	.087
A × B × C	1	46.473	.165	.686
課 題 4				
被験者選択(A)	1	3286.316	13.185	.000
典型の判断(B)	1	704.352	2.826	.095
集 団 (C)	1	.048	.000	.989
A × B	1	162.636	.652	.421
A × C	1	43.492	.174	.677
B × C	1	5.842	.023	.879
A × B × C	1	474.632	1.904	.170
課 題 5				
被験者選択(A)	1	5024.076	16.376	.000
典型の判断(B)	1	6.055	.020	.888
集 団 (C)	1	327.566	1.068	.303
A × B	1	538.505	1.755	.188
A × C	1	203.034	.662	.417
B × C	1	680.290	2.217	.139
A × B × C	1	514.536	1.677	.198

結 果

まず各被験者を被験者自身の選択によって選択肢Aを選んだ人と選択肢Bを選んだ人に分けた。各条件において、他の人の選択肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値の平均は、表12から表16の通りであった。この推定値について各課題別に、被験者自身の選択、典型的な人の選択の判断の有無、推定する集団の3要因で分散分析を行った(表17参照)。その結果、全ての課題において被験者自身の選択の主効果が有意であった(課題1, $F(1,126) = 39.65$, $p < .01$, 課題2, $F(1,128) = 10.18$, $p < .01$, 課題3, $F(1,127) = 16.15$, $p < .01$, 課題4, $F(1,127) = 13.19$, $p < .01$, 課題5, $F(1,127) = 16.38$, $p < .01$)。しかし典型的な人についての判断の有無の主効果、推定する集団の主効果、及び全ての交互作用はどの課題においても有意ではなかった。

推定値の正確さについては、実験1と同様に被験者自身の選択のデータを用いて各課題で選択肢Aを選んだ被験者の割合を算出し、これを各課題で選択肢Aを選ぶ人の割合の真の値(%)と見なした。分散分析で他の人の選択肢Aを選ぶ人の割合の推定値に、被験者自身の選択以外の要因の効果が全て有意でなかったため、被験者自身の選択の要因のみを取り上げ、各課題別に被験者自身の選択の条件別の推定値の平均と真の値との間でt検定を行ない、表18にその

表18 実験2 選択肢Aを選ぶ人の割合(%)の推定値のt検定

	課題 1	課題 2	課題 3	課題 4	課題 5
真の値	32.09	24.26	42.22	52.59	31.11
被験者の選択					
A	55.70 t = 9.19**	53.52 t = 7.79**	58.33 t = 7.01**	67.46 t = 8.76**	44.17 t = 4.01**
B	35.67 t = 2.03*	39.80 t = 8.34*	46.45 t = 2.32*	57.28 t = 2.18*	30.77 t = 0.21 ns

* $p < .05$, ** $p < .01$

結果を示した。t検定の結果、課題5で被験者自身が選択肢Bを選んだ場合、両者の間に有意な差はみられなかったが、残りの全ての課題、条件において推定値の平均は真の値よりも有意に大きかった。

考 察

他の人の選択の推定値に推定の対象となる集団が効果を持たず、推定値そのものに差がなかったことは、被験者が事例を利用する場合にその代表性を考慮せず、大小2つの集団に対し、同じ事例を用いて合意の推定をするという第2の仮説を支持したものであり、第1の仮説は否定された。P大学は女子大学であり、P大学生について推定する事は女性の集団について推定する事であり、一方、大学生には男性も含まれるから大学生について推定する事は男女を含んだ集団について推定する事であった。従ってこの2つの集団について推定する場合、推定の材料となる適切な事例が異なるため、推定値に差があると考えられたが、結果はどの課題においても差が見られなかった。5つの課題のどの課題においても差がなかったことを2つの集団が包含関係にあった事とあわせて考えると、被験者はP大学生について推定する場合も大学生について推定する場合も、同じ事例、つまり想起しやすい身近なP大学生の事例を利用したと考えられる。また、男性を含んだ集団である大学生についての推定に、女性であるP大学生の事例を用いたとすれば、事例の代表性についての考慮もなかったと考えられる。

推定値の判断において典型的な人の選択の判断の有無は効果を持たなかったが、これにより、典型的な人の選択を判断すること自体が想起する事例に影響する、という第3の仮説は否定された。従って実験1の結果を、最初に典型的なP大学生の選択の判断を聞いた事によって解釈することは妥当ではないといえる。

被験者自身の選択については、分散分析でこの主効果が全ての課題で有意で

あり、また、被験者自身の選択と同じ選択について合意を相対的に大きく推定していることから、実験2ではフォールス・コンセンサスが全ての課題で起こったといえる。推定値の正確さに関して見ると、被験者が選択肢Aを選んだ場合には選択肢Aを選ぶ人の推定値を過大評価しており、被験者が、多くの人が被験者自身の選択と同じ選択をしている、と判断したことを示している。被験者自身が選択肢Bを選んだ場合には2つの課題で選択肢Aを選ぶ人の推定値を過大評価していたが、これは逆にみれば被験者が被験者自身の選択である選択肢Bを他の人が選ぶ割合を過小評価したことを示している。しかしこの実験では、A、Bは実験において2つの選択肢を任意に割り当てただけであり、A、Bに特に意味はない。むしろ被験者の推定が時には過大、時には過小であって実際の割合とはほとんど無関係であることを示す結果と考えるべきである。またこれは、合意の推定が事例情報にもとづいて論理的に行われていると言う立場にたてば、被験者の利用した事例そのものが実際の割合を反映していない偏ったものであったことを示す結果と考えられる。

総合考察

実験1では、被験者自身の選択の差及び推定に用いられた事例の差により合意の推定に違いが見られるかどうかを検討した結果、推定に用いられた事例の差の効果の方が、被験者自身の選択の差による効果よりも大きいことが示された。基本的に、合意の推定がその人自身の反応の影響を受けるというフォールス・コンセンサス現象については2つの因果関係が考えられる。一つはその人自身の反応を原因とし合意の推定を結果とする考え方であり、もう一つはその人自身の反応と間接的な関連はあるが独立した第三の要因を原因とし合意の推定を結果とする考え方である。前者の考え方の代表的なものは、その人自身の反応に直接関係する動機付けによる説明や、自分の反応の顕著さ (salience) が推論に影響するという説明であり、後者の考え方の代表的なものは、認知的

な説明の中でもその人自身の反応とは直接は無関係な選択的接触などの説明である。実験1の合意の推定の結果からは、その人自身の選択と合意の推定の関係としては後者の関係が強く、合意の推定は事例を基にした論理的な認知的推論過程によるところが大きいと考えられる。

実験2では、実験1において被験者に典型的な人の選択の判断を行わせたことが事例の認知的利用可能性を変化させ、それが原因となって実験1の結果が得られたという仮説が否定された。また、被験者が合意の推定において利用した事例が推定の対象となる集団により異なっていなかったことから、被験者は事例がその集団全体の傾向を十分に反映する代表的な事例であるか、という事例の代表性を考慮することなく、選択的接触によって容易に手に入る被験者の身近な人の事例、つまり認知的利用可能性の高い情報を用いるという簡便な方法 (availability heuristic) で合意の推定を行ったことを示している。これは、人の認知能力は限られたものであるから、人は認知的に困難な課題に対しては正確な結論が得られるが手間のかかる方法よりも、不正確になりやすいが認知的なコストの小さい単純な方法をとるといって、人を認知的儉約家 (cognitive miser) と見る考え方 (Fiske & Taylor, 1984) と一致するものであった。

このように2つの実験から、事例を基にした合意の推定の過程は次のように考えられる。合意の推定に当たっては認知的に利用可能性の高い事例が想起され、想起された事例に応じて合意の程度が推定される。推定においては、想起された事例からの推定は論理的であるが、事例を集める過程での選択的接触と事例を想起する過程での認知的利用可能性によって歪みが生じる。また推定に対してその人自身の反応は動機付けの面でも認知的な面でも事例情報ほどには影響を持たない、と考えられる。しかし、その人自身の反応の違いがあまり影響しないのであれば、なぜ反応の違いによる合意の推定の違いであるフォールス・コンセンサス現象が多くの研究で確認され、また本実験でも実験1の一部と実験2において見られたのであろうか。

その理由の1つは動機付けの効果であるが、ここで考えられた推定の過程によっても説明が可能である。まず事例を基にして推定される場合には、選択的に接触する事例とその人自身の反応が同じであることが多く、結果として事例から論理的に判断される合意の推定とその人自身の反応の間に対応関係ができるということが考えられる。また、想起できる事例の中に適切な事例が少なく論理的には合意の推定のできない場合でも、簡略な方法を用い、認知的に利用可能な身近な事例、即ち自分の反応に近い事例を利用して推定する結果、やはり合意の推定とその人自身の反応の間に対応関係ができるということが考えられる。このように動機付けが関与しない場合でも、認知過程の歪みによって多くの事態でフォールス・コンセンサスが起こるため、この現象が一般的に見られると考えることができる。

ただここで示された過程は、事例情報を利用して推定のできる場合にのみ当てはまるわけであり、事例情報を用いることのできない新奇な課題について合意を推定する場合 (e.g. 岡, 1990) には、社会的投影 (social projection) なども考慮した認知モデル (Hoch, 1987) が必要であると考えられる。また事例情報が利用される場合でも、個々の事例そのものが推定の材料となるのか、事例情報をまとめた全体の傾向についての認知が推定に影響を与えるのかは検討の必要がある。実験1では典型的な人の選択の判断を利用された事例を示すものとして扱ったが、この指標では事例が個々に利用されたか、事例全体の認知として利用されたかを判断することはできない。またこの指標自身、事例の指標としては曖昧なものであり、利用された事例の種類とその割合を正確に反映できるものではなかった。従って事例情報についてさらに検討する場合には、利用された事例情報のより正確な指標を用い、事例がどのように推定に利用されるかを調べる必要がある。また、事例情報の影響について、利用される事例を実験的に操作することで事例情報と合意の推定の因果関係をより明確にすることも今後の課題である。

参 考 文 献

- Berscheid, E. & Walster, E.H. *Interpersonal Attraction*. 2nd ed. Reading, MA: Addison-Wesley, 1978.
- Festinger, L. A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Fiske, S.T. & Taylor, S.E. *Social Cognition*. Reading, MA: Addison-Wesley, 1984.
- Hoch, S.J. Perceived consensus and predictive accuracy: The pros and cons of projection. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1987, 53, 2, 221-234.
- Marks, G. & Miller, N. Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoretical review. *Psychological Bulletin*, 1987, 102, 1, 72-90.
- Mullen, B. Egocentric bias in estimates of consensus. *The Journal of Social Psychology*, 1983, 121, 31-38.
- Mullen, B., Atkins, J.L., Champion, D.S., Edwards, C., Hardy, D., Story, J.E. & Vanderklok, M. The false consensus effect: A meta analysis of 115 hypothesis tests. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1985, 21, 262-283.
- Mullen, B. & Hu, L. Social projection as a function of cognitive mechanisms: Two meta-analytic integrations. *British Journal of Social Psychology*, 1988, 27, 4, 333-356.
- 岡 隆 合意性の過大・過小推測現象に対する認知反応アプローチ. 日本グループ・ダイナミックス学会第38回大会発表論文集, 1990, 17-18.
- Ross, L., Green, D. & House, P. The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1977, 13, 3, 279-301.
- Tversky, A. & Kahneman, D. Availability: A heuristic for judging frequency and probability. *Cognitive Psychology*, 1973, 5, 207-232.

The effects of sample information on consensus estimation.

Wataru Ide

This study examined the influence of sample information on consensus bias — the tendency to estimate high consensus for their own responses (i. e., the false-consensus effect). Experiment 1 showed that the effect of sample information on consensus estimation was greater than that of motivation. Irrespective to their own responses, subjects who had the similar sample information made the same biased estimation. Experiment 2 showed that the availability heuristic was used in estimation. Both subjects who estimated consensus among their own college students and subjects who estimated consensus among college students in general showed the same consensus bias because they used the same sample information available. The importance of sample information as a basis for consensus estimation is discussed.